

Title	脈動する「オブジェ」と「色彩」 - フェルナン・レジェの創作活動の軌跡(Abstract_要旨)
Author(s)	山本, 友紀
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2009-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/123942
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

学位審査報告書

新制
人
114

氏名	(ふりがな) やまもと ゆうき 山本 友紀
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博 第 463号
学位授与の日付	平成21年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻
(学位論文題目)	
<p>脈動する「オブジェ」と「色彩」 —フェルナン・レジェの創作活動の軌跡—</p>	
論文調査委員	主査 教授 稲垣 直樹 副査 教授 松田 清 副査 教授 篠原 資明 副査 准教授 多賀 茂

(論文内容の要旨)

フェルナン・レジェ (1881-1955) は、絵画をはじめ、舞台装飾、映画、装飾壁画、陶製彫刻など多種多様な作品の制作を手がけた、20 世紀前半を代表する芸術家である。本学位申請論文は、多岐にわたるレジェの芸術活動の諸相を、「オブジェ」の概念と「色彩」の扱い方を軸に、当時の様々な芸術的潮流を視野に収めるとともに豊富な文献資料をもとに詳細に検証することで、その創造性を統一的視座によって捉えようとしたものである。

第1章では、レジェが、キュビズムを中心とする前衛的な芸術的動向の一般的な流れに位置しながらも、彼独自の世界の捉えかたを絵画上でいかなる表現方法によって示しているかを探った。「概念的なリアリズム」へのレジェのアプローチを吟味することで、その作品が模倣的な再現を完全に否定したうえで、身の回りの世界を画家自身の内面において解体・統合しようとしたものであることを確認した。レジェの絵画は、日常的な街の情景に読み取りうる「コントラストの状態」を、「オブジェ」と「自由な色彩」を基本単位として再現することで成り立っている。それは機械的要素をモチーフに据えた絵画作品へと結実し、それらの作品は、画家が第一次世界大戦を体験した後に迎えるいわゆる「機械時代」を形成している。

第2章では、レジェがサーカスなど、当時、民衆の間に浸透していた娯楽芸能から、「オブジェ」の概念と結びつく多くのインスピレーションを得ていたことに着目し、「機械=オブジェ」の概念を基盤とする、レジェ独自の世界の捉えかたを再確認した。さらに、バレエ・スエドワに提供した舞台装飾の構想や映画作品《バレエ・メカニク》の制作を通じて、「オブジェ」の造形的な価値に対するレジェの思想を探查し、「オブジェ」の概念が絵画以外の分野でも有効性をもっていたことを示した。

第3章では、個人の感性や表現の自由を圧迫し、節度と調和を過度に強調する第一次世界大戦後の一つの支配的潮流と、レジェの作品との関連性を探った。アメデ・オザンファンとシャルル=エドゥアール・ジェンヌレ (ル・コルビュジエ) は、その著作『キュビズム以後』とその雑誌『エスプリ・ヌーヴォー』等を通じて芸術運動「ピュリスム」を展開した。こうした「ピュリスム」は、機能性や有用性を重視し、それらを基盤にした絵画の必要性を唱えていたが、そのような主張が、機械を重要な「オブジェ」とみなすレジェの考えを発展させる重要な指針となっていたことを証明した。併せて、「機械」をモデルとする幾何学的な形態によるレジェの人物表現法のうちに、「古典的」性質が混在していることを、複数の文献資料と作品をもとに解明した。また、レジェの「古典主義への回帰」に対するル・コルビュジエの影響は、レジェの建築についての思想にも表れており、建築の機能の問題が、「オブジェ」とその周囲との関係性、ひいては、絵画そのもののあり方への意識を高める機会をレジェに与えた。こうした点を具体的な絵画作品に即して明らかにした。

氏名	山本友紀
----	------

第4章では、1925年の現代装飾美術国際博覧会における壁画の制作を通じて、レジェの絵画の表現方法が建築の世界に拡張されるとともに、抽象性を強めていく有り様を論じた。まず、抽象と具象、あるいは装飾壁画とイーゼル絵画という、レジェの二項対立的な考えを指摘した。彼の作品はこれら二つの表現方法や形式の間で微妙に揺れ動きながら、装飾性に富む絵画作品へと進展していくのだが、その過程を、自然界の観察を通じた「オブジェ」の新たな側面の発見と、「自由な色彩」の観念の先鋭化との連動性において捉えた。

第5章では、1930年代の政治・社会にあって左翼に対する関心が増大する中で、絵画そのもののあり方をめぐるレジェの問題意識が深化していく過程を、その創作活動との対応関係を示しながら検討した。その際、芸術と民衆の関わりという問題に、レジェがどのように対処していったのか、その手がかりを「新しいリアリズム」に関する画家独自の思想に求めた。「新しいリアリズム」の考え方は、「オブジェ」の概念を基盤に据えた「大いなる主題」への取り組みによって、芸術が社会的役割を担うという主張へとつながるものである。このような考え方が、一般民衆の生活をその具体的なテーマにおいて捉えた大型のイーゼル絵画制作の理論的な根拠となっている。

第6章では、「オブジェ」への関心の増大と、「自由な色彩」への欲求が、モザイク画、ステンドグラス、陶製彫刻など、モニュメンタルな作品の制作を牽引していたことを論じた。それらの、建築と一体となった大型の作品は、異なる分野で活躍する芸術家たちとの協働作業を通じて初めて成立する。そのような点が、「芸術の統合」の実現を目指すレジェの志向とも呼応しており、集団的作品の制作手法は、絵画作品にもみられた造形意識と密接な関連性を持っていることを確認した。

以上のように、本学位申請論文は、多岐にわたるレジェの創作活動の軌跡を、同時代の多様な芸術的潮流との関連において考究し、レジェの作品の通時的変化の深層に、その創造行為の一貫性を探った論考である。

(論文審査の結果の要旨)

フェルナン・レジェは、アヴァンギャルドの流れを汲んだ新しい表現様式を生み出しながら、絵画制作を中心に、複数のジャンルで活躍した。このようなレジェの芸術活動については、これまで様々な観点から論じられてきたが、それらは、ある一定の時代やジャンルに視野を限った捉え方が主流であったために、絵画という分野を超えて展開したレジェの芸術活動の全体像を見失いがちであったと言える。本学位申請論文は、こうした問題点を念頭に置きつつ、「オブジェ」と「自由な色彩」への関心を切り口としながら、絵画とは異なる領域での創作をも射程に収めることで、全体像が把握しにくいレジェの芸術活動に、一貫した見取り図を与えようとする極めて意欲的な試みである。

本論文の第一の成果は、レジェにおける「オブジェ」の概念の独創性と、そのレジェ芸術全体における重要性を明示した点である。作品の新たな素材や対象として「オブジェ」を発見し、「オブジェ」をその文脈から切り離して提示するという点自体は、20世紀の芸術においてそれほど新しいわけではない。それに対して、本論文では、レジェの「オブジェ」の概念が、そうした芸術の一般的な傾向に還元できるものではなく、周囲の世界の捉え方までも規定し、絵画とは異なる芸術分野にまで適用される独自のものであり、レジェのあらゆる芸術作品の核となっていることが明らかにされている。とくに、舞台芸術や映画の分野における創作やモニュメンタルな作品への取り組みなど、絵画制作とは切り離して捉えられる傾向のあったレジェの創作を、「オブジェ」概念の展開の一環として位置づけ、絵画作品とも共通する芸術的関心を見出すことによって、彼の「オブジェ」概念の多面性を浮かびあがらせている。

第二の成果は、レジェが従来の絵画のあり方へ異議申し立てをする立場から、絵画の形式と機能の革新を図りつつ、他方では「伝統芸術」を参照していたという事実について詳細な検討を加えている点である。レジェの「古典への回帰」を論じる上でよく取りあげられるのが、第一次世界大戦後の芸術的傾向や芸術運動「ピュリズム」の影響である。これまでの研究では、レジェ自身が古典的な傾向へ向かう特質をピュリズムの美学に触れる以前から、どれほど持ち合わせていたかについては十分に探究されず、両者の美的関心の親和性を提示するにとどまっていたといえる。本論文ではこの問題点を克服すべく、レジェの古典的絵画に対する見解を、「オブジェ」の概念から導き出される、絵画の客観性や調和といった性質を重視する姿勢に沿って考察している。それによって、「古典的要素」と「前衛性」を兼ね備えた画家の特質を、より明快なパースペクティブの下に照らし出している。同時に、「機械」というキーワードをもとに、レジェが絵画制作に建築学的な視点を導入していった過程を読み解き、「オブジェ」という独自の観念に即しながら、機械をモデルとしたピュリズムの指針が発揮されたレジェの絵画作品を通じて、ピュリズムの美学の有機的な発展過程を示している。さらに、レジェがピュリズムの担い手たちとの交流を契機として、絵画という従

氏名	山本友紀
----	------

来の枠組みを超えた新しい活動領域を切り開いていく道筋を、広範な文献資料に基づいて跡付けたことは、レジエの芸術活動におけるピュリスムの意義を捉えなおすことにもつながっている。

第三の成果は、レジエ独自の表現様式がイーゼル絵画と装飾壁画の両分野にわたり、そこで生み出されたそれぞれの技法が相互に補完しあいながら多様に展開していくものであったことを示している点である。本論文では、レジエの装飾的な作品が、どのような着想に基づき、どのような造形的な実験段階を経ていたのか、これまで十分な注意が払われてこなかったデッサンやグアッシュによる作品などの習作を参照しながら、綿密に検討している。それらの具体的な資料をもとにした検討によって、レジエの造形的な探索が抽象絵画を創出する方向へと向かっていく過程で、「オブジェ」の概念が重要な参照枠として機能していたことを立証するのにも成功している。

第四の成果は、レジエの独自の社会的・政治的問題意識を新たな観点から分析した点である。レジエの芸術活動が、当時の複雑な社会的・政治的動向や芸術環境とも交差していたという事実は従来の研究ではしばしば言及されてきたが、レジエの作品のテーマや人間関係の分析が中心で、画家が内面に抱える問題意識にまで踏み込んだ解釈はほとんどなされてこなかった。本論文はこれらの点を考慮に入れ、レジエが中世に見られるような、絵画や建築といった分野の垣根を越えた協働作業を志しながら、文化遺産を知的ブルジョワの専有物ではなく、一般民衆に開かれたものにする意図を持っていたという事実に注目している。そして、「新しいリアリズム」という画家独自の観念を綿密に読み解く一方で、壁画をはじめとするモニュメンタルな作品を掘り起こしながら、画家の社会的・政治的な位置づけに関する検討を加えている。これらの検討は、「オブジェ」と「自由な色彩」への関心を中心に展開したレジエの芸術活動を、新たな角度から照らし出すことになっている。

以上のように、本論文は、フランスでの膨大な一次資料の渉猟を基礎として、野心的で独創的な論考を展開し、新しい知見をフェルナン・レジエ研究にもたらした卓抜なものであるといえる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成20年12月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。